

小学生新聞の投書特集における結束性

設 樂 馨

(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

The cohesion of the special feature on letters to the editor in Newspaper for Children

Kaoru SHITARA

*Department of Japanese Language and Literature, School of Letters
Mukogawa Women's University*

Abstract

How can one describe the cohesion among special features in letters to the editor in newspapers for children? Those texts are from different authors and therefore cannot provide consistent themes. Hence, these were verified by systemic functional linguistics. The analysis from the viewpoint of cohesion, even from both sides of fictitious textuality and cohesive elements, revealed that each is fragmented and is a “Yudai-kun’s letter,” which is the point at which the special features start. Instead, of speaking “together,” everyone simply spoke about their own subject matter. However, the suggestion feature showed a repetition of subject matter and stylization of structure. This structure foreshadowed a cohesiveness of writing that converged on the reader. The editorial team made disparate sentences appear as if they were one coherent sentence. Furthermore, as the days went by, opinions deepened. Consequently, readers ended up “discussing” them all together throughout the paper.

1. はじめに

2011年「毎日小学生新聞」に投書による特集記事が掲載され、書籍化し、話題になったことがある。一連の特集タイトルは『ゆうだい君の手紙』（ゆうだい君の手紙そのものを区別するため、特集に『』を付す）、副題は「東電と原発 キミはどう思う？」であった。また、書籍化したもののタイトルは、手紙冒頭を引用して『僕のお父さんは東電の社員です』¹⁾であった。投書群の文体的な特徴や各々の投書の主張については拙稿²⁾で論じた。この投書群の締めくくりの言葉として、新聞編集部は次のように述べる。

「ゆうだい君の手紙」を読んだみなさんがたくさんの手紙を送ってくれたため、ゆうだい君が望んでいた「みんなで話し合う」ことが紙面を通してできました。(第26109号)

しかし、投書の書き手は何を読んで意見を書き、その投書とその後の投書は、本当に互いの主張を踏まえて「話し合う」ということができたのだろうか。「話し合う」というのは、一つの談話としてまとまりを持つと考えられる。とすると、後述する選択系機能言語学(SFL)の立場から言えば、投書群がひとまとまりの「テキスト」である、と考えられる。果たして、書き手の異なる文章を束ねただけで「話し合う」ことになったのか、本稿では、選択系機能言語学(Systemic Functional Linguistics=SFL)に従って分析し、架空のテキスト性を生成する「新聞」という一つの文章構造のパターンについて考察する。

2. 選択体系機能言語学(SFL)について

談話研究の一つとして、Halliday の SFL は、機能主義(functionalism)の立場から言語使用におけるコンテキスト(状況、context)を理論化することを目指したものである。その結果、談話を3通りの視点から分析するメタ機能(metafunction)という概念が提起された。この概念に従うと、本稿の投書は次のように整理される³⁾。

- 活動領域(field)：何について話しているかという話題、あるいは目的
紙面で東電の原発事故責任について意見を述べる。(各々の投書の話題や目的は拙稿²⁾を参照されたい。)
- 役割関係(tenor)：会話に関わる人たちの関係
「毎日小学生新聞」の読者と編集部。
- 伝達様式(mode)：どのようなやり方で伝えるのか
投書による特集記事。大きな見出し、リード文、投書ごとの小さな見出しの元に意見文を配置。日刊新聞として読者あるいは小学校へ配布される。

これら3つの要素によって、言語使用域(register)と呼ばれる状況のコンテキスト(context of situation)、つまり、投書による特集が具現する。仮に、活動領域(話題や目的)が同様でも、教室で討論するとなれば、役割関係や伝達様式が変わる。しかし、ここで特に問題とするのは、書き手の異なる、投書の特集記事であること、つまり、SFLにおける伝達様式(mode)である。この伝達様式とは、「表現形式の選択に関わる」ものであり、伝達様式が表れるテキスト形成的機能(textual metafunction)とは次のように説明される⁴⁾。

私たちが自分の経験などを人に話すとき、どこから始めればよいか、どのように話を続けられればよいか、どこで盛り上げてどこにオチを持ってくるかなど、いろいろ考えて話を進めますが、そこで働いているのがこのテキスト形成的機能なのです。

このテキスト形成的機能は、結束性(cohesion)として観察できる。結束性(cohesion)は、ハリデイ・ハサン(1997)の定義では、テキスト内に存在し、テキストをテキストとして定義する意味の諸関係である。意味の諸関係とは、典型的には先行文(普通は直前に先行する文)と逆行照応なつながりを有する句や節の諸関係で、テキストに観察される⁵⁾。また、意味の諸関係ということは、文法的構造によって具現されるものではない。M.A.K.ハリデー(2001)より例を引くと次の通り。「例えば、John と he のように1つの語彙項目がテキストにおいて互いに異なる2つの形で生じた場合、その間に構造的な関係はない。それらはいかなる構造パターンによっても結び付けられていないのである。」⁶⁾

では、新聞というテキストにおいて、先行するとか、逆行するといったことは、どのように捉えるのが妥当だろう。通常、縦書きの紙面構成(文字の大きさや配置)では、右上から左下が読むべき順序になるが、見出しの文字の大きさや配置は、この順序を変えてしまう可能性がある。小学生新聞ではない、一般紙の新聞報道記事のジャンル構造を分析した鷲嶽(2009)は、見出し(Headline)を3つに細分すること、White(1997)⁷⁾を援用した核(見出しやリード文)と衛星(本文)の関係などにより、通常のテキスト性とは異なる、日本語の新聞ならではの特徴をいくつも指摘している⁸⁾。本稿ではハリデイ・ハサン(1997)が指摘する「架空のテキスト性」から順に検討しよう。

3. 分析

(1) 架空のテキスト性

架空のテキスト性とは、「読み手や聞き手に予想を設定することによって、架空のテキスト性を押しつけるタイプの結束性」である。「しかし、その予想は、過去にかかわるものなので、どうしても満たされることはない」とし、新聞の特徴として「多くのニュース報道では、それを理解するには、前日の新聞は同じテキストの一部であるという想定が必要である」としている⁹⁾。

架空のテキスト性は、ニュース報道でない、投書特集のテキストにも観察されるだろうか。新聞というジャンルにおいて、最初に読むものは見出しであり、この見出しに関して鷺嶽(2009)では、通常の見出し(Headline：以降 HL)と下位の見出し(Sub-Headline：以降 SHL)と先立つ見出し(Pre-Headline：以降 PHL)に細分した。試みに、本調査対象の特集初日の見出しも細分して、分析してみよう。

(見出し1・HL)批判されても プロとしての力発揮を(第26088号1面)

(見出し2・PHL)全国の読者からの反響(第26088号1面)

(見出し3・SHL)大変なのは東電だけじゃない(第26088号1面)

(見出し4・HL)東電だけが悪いんじゃない(第26088号1面)

(見出し5・HL)まずは、謝るべきだ(第26088号1面)

(見出し6・HL)電気にたよらない生活を心がけてみる(第26088号2面)

(見出し7・SHL)電気にたよらない生活を(第26088号2面)

1面は見出し1が、2面は見出し6が通常の見出し(HL)となる。最も分量の多い投書の見出しであり、いわば、記事の核と考えられる。ただし、意味的に見出し1は見出し3と同じ投書Aに、見出し6は見出し7と同じ投書Bを要約する。つまり、当該のAとBの投書には2つずつ、見出しが存在する。そこで、HLより小さい見出し3や見出し7は下位の見出し(SHL)と位置付けられる。

ここでSHLとHLの検討はひとまず後に回し、HLの見出しの次に目立つ配色、配置となっている、先立つ見出し(PHL)として、見出し2に注目しよう。これはリード文(後述のリード1で見る通り、投書特集の経緯)に付いた見出しであり、鷺嶽(2009)によれば、「PHLは典型的には当該記事が読者にとって既知の情報(あるいは既知であるという前提の情報)の追加情報であることを示す」に当てはまる。

リード1に先行する見出し2の「反響」は、リード1に含まれる、過去のゆうだい君の意見に対する反応を指す。よって、過去を設定して読者に予想させる、架空のテキスト性を有する。

2面は、1面のようなリード文がないが、特集の表題『ゆうだい君の手紙』の元に「=1面からつづく」とあり、前ページから読む想定が設定される。前ページが過去の新聞の設定をしていたので、引き続き2面も「架空のテキスト性」が保持されることになる。

これらのリード文や見出しは、特集初日となる5月30日(第26088号)1日分の1面と2面である。同様に、他日の特集にも1面リード文に過去の設定、2面の付言に「=1面からつづく」という定型が認められ、架空のテキスト性が認められた。1面のリード文を抜粋し、過去の設定に下線を引く。(「=1面からつづく」は各日とも同一であるため、引用しない。)

(リード1) 5月18日の毎小で、東京電力につとめる父親を持つゆうだい君(東京都・小6)の手紙を紹介しました。(第26088号1面)

(リード2) 昨日に引き続き、毎小編集部に届いたゆうだい君(東京都・小6)の手紙を読んだ全国の読者の意見を紹介します。(第26089号1面)

(リード3) 5月18日の毎小で紹介したゆうだい君(東京都・小6)の手紙を読んだ全国の読者が、さまざまな意見を編集部に寄せてくれています。(第26090号1面)

- (リード4) 5月18日の毎小で、父親が東京電力(東電)に勤めるゆうだい君(東京都・小6)の手紙を紹介し、全国の読者からたくさんの意見が編集部に届きました。(第26108号1面)
- (リード5) ゆうだい君(東京都・小6)の手紙をクラス全員で読み、学級で意見をまとめてくれた学校もあります。(第26109号1面)
- (リード6) 父親が東京電力に勤めるゆうだい君(東京都・小6)の手紙(5月掲載)を読み、福島県郡山市立赤木小4年2組のみんなが意見を送ってくれました。(第26144号1面)

リード3は、月初めとなる6月1日で、リード4は中盤の特集、リード6は特集最後の掲載である。この3つのリード文は、昨日と連続した特集記事ではないため、読者が連続する日刊紙として読まない場合も想定される。そのためか、日付や経緯が述べられ、ほかのリード文よりも丁寧に、過去の新聞と同じテキストである想定を解説する。

反して、上中下と連続するうちの「中」に相当するリード2は説明が粗雑である。日付も具体的な数字で示すのではなく「昨日」という、今日を基準に読者が減算して日付を特定する単語である。また、特集の中盤で、前日に続いて発行されたリード5は、日付に類する語句がなく「ゆうだい君(東京都・小6)の手紙」という句が、読者に過去の新聞と同じテキストの一部であるという、架空のテキスト性を押し付ける。

架空のテキスト性は、各日、あるいはそれぞれの投書と「ゆうだい君の手紙」との結束性であることが確認できた。この関係を図1にまとめておく。5月30日と5月31日の投書、あるいは、6月1日と6月20日の特集記事に結束性はない。常に、5月18日の「ゆうだい君の手紙」と、各々の投書との結束性である。

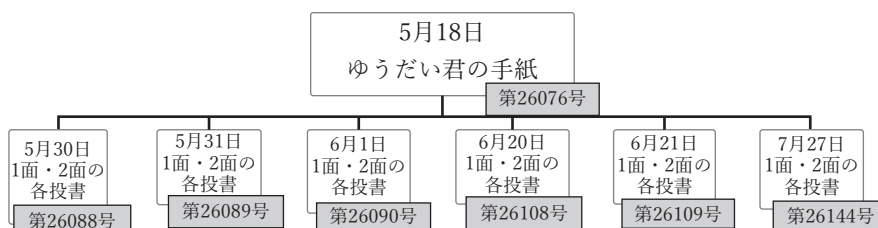


図1 見出しによる架空のテキスト性から示された結束の諸関係

(2) 逆行照応なつながり

前節でみた架空のテキスト性は、新聞ならではの見出しやリード文における事情であり、ハリデイ・ハサン(1997)では、読者に押し付けられたテキスト性であって「偽りの(または未決定の)結束性」とされる¹⁰⁾。いわば、結束性として特異なものである。典型的には、先行文と逆行照応なつながりを有する句や節の諸関係が存在するのであり、その諸関係は結束的要素を観察することで分析できる。

結束的要素とは、英語では指示(人称詞、指示詞、比較語)、代用(one、the same、do、節)、省略、接続である。本稿は日本語のテキストであるので、英語と同じ分析ができるわけではないが、結束的要素となりそうな語句の意味を観察してみよう。まずは、人称詞である。(検討する語句に下線を引く。)

(投書C) 君がお父さんの仕事をかばう気持ちはわかります。でも、君の意見の進め方には少し無理があると思いました。(第26088号)

この投書の書き手は「3児の母 K・Nさん」で、小学6年生のゆうだい君と世代が異なる。文頭で「ゆうだい君」を「君」と呼称し、子どもと話し合う大人の発話者としての役割(発話役割 SPEECH ROLES)を区別し、「ゆうだい君」に受信者(ADDRESSEE)の役割を当てる。2文目も同じく「君」を用いる。

次に指示詞の例を挙げる。投書D「そんなこと」とは、「ゆうだい君」の意見「みんなで話し合うこと」

を指す。

(投書 D) ゆうだい君の言いたいことは、ものすごく伝わる。しかし、今はそんなことを言わないで、日本全体が力を合わせて、なしとげるべきではないか。(第 26090 号)

投書 C と D は、架空のテキスト性により確認した結束の諸関係と同じく、ある書き手による投書と「ゆうだい君の手紙」との結束性を示すことが分かった。

ほかに、書き手の異なる投書どうしに結束性はあるだろうか。といっても、特集記事が掲載された初回の 5 月 30 日から 6 月 1 日は、特集開始前に送られた投書が掲載されたものであり、特集を読んで書かれた投書とは考えられない。また、6 月 21 日と最後の 7 月 27 日は、リード文に、小学校のクラスで「ゆうだい君の手紙」を読んで送った意見だと書かれている。こうした掲載日とリード文から判断すると、「ゆうだい君の手紙」そのものだけでなく、特集『ゆうだい君の手紙』を読んでから投書を送ったと推定されるものは、6 月 20 日(計 6 本)に絞られる。その 6 本より、人称詞「みなさん」を取り上げる。

(投書 E) 私の友達にお父さんが、東電で働いている子がいます。その子は今、いじめられています。(中略) どうして、何も悪くない彼女がいじめられるのでしょうか。それは、新聞やテレビでたくさんの偉い人たちが、東電を批判しているからです。そして、みんながそれを信じてしまうからです。(中略) 東電を批判しているみなさんは、この先こういう生活(筆者注・すべての原発がなくなり電力不足が起こり不便になった生活)でよいのですか。(第 26108 号)

投書 E の書き手は、東電で働く父を持つ子に対するいじめが、「東電を批判している」報道を背景とし、その報道を信じる波線部「みんな」に原因がある、と考えている。この「みんな」は、恐らく、いじめる側の級友たちを指し、投書間の逆行照応なつながりとは無関係であろう。報道を信じて東電を悪とする級友が、東電で働く父を持つ友達をも悪とみなし、いじめが発生する。そう考えて、「たくさんの偉い人たちが「みなさん」に信じさせた原子力発電の全廃は、それによって電力不足を招き不便な生活を強いる事実を訴え、それを是とするのか、と「みなさん」に抗議する。

この「みなさん」に投書 E 以前の投書との結束性を見いだせるのか。6 月 20 日以前の、東京電力への批判は、下記の見出しに代表させる通り複数の投書が存在する。上から順に、被害者対応(見出し 5 と見出し 8)、辞任ではない問題解決(見出し 9)、安全よりもうけを取って危険な原子力発電を続けたことへの非難(見出し 10)であり、原子力発電を全廃しない東京電力を批判するわけではない。つまり、投書 E が抗議する「みなさん」と、それ以前の投書との結束性を明言することは困難である。

(見出し 5) まずは、謝るべきだ(第 26088 号)

(見出し 8) 被災者の気持ちを(第 26089 号)

(見出し 9) 東電や政府は逃げずに問題解決を(第 26090 号)

(見出し 10) 東電はもうけを重視した(第 26090 号)

以上のとおり、結束的要素から逆行照応なつながりを観察しても、それぞれの投書と「ゆうだい君の手紙」との結束性であることしか認められなかった。この関係を図 2 にまとめておく。5 月 30 日 1 面の 3 本の投書は、各々が 5 月 18 日の「ゆうだい君の手紙」との結束性しか認められない。投書特集を読んだ後に投書を書いた可能性のある、6 月 20 日 1 面の投書も 3 本とも、各々が 5 月 18 日の「ゆうだい君の手紙」との結束性しか認められない。

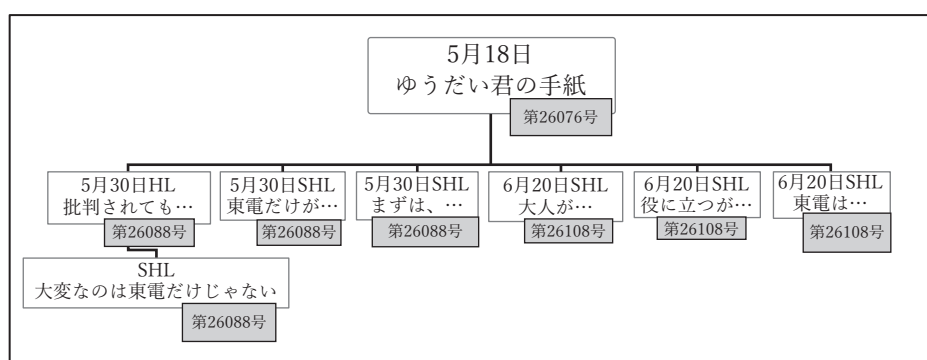


図2 逆行照応なつながりから示された結束の諸関係

(3) 節複合関係

鷲嶽(2009)によれば「SHL と HL は節複合関係における拡充の概念を適応させることができる。すなわち、概略、SHL は HL の内容を詳しく述べたり(敷衍)、HL に情報を追加したり(拡張)、HL を時系列や因果関係などで修飾したり(増強)することにより拡充する」とある。ここで、後回しにした SHL と HL に注目しよう。実は投書特集では、鷲嶽(2009)の分析した一般紙の時事情報と大きな違いがある。

そもそも、時事情報は見出しの元に記事がある、という考え方である。鷲嶽(2009)では、「必須の」要素となる HL に対し、「任意の」見出しの PHL と SHL は相対的に小さいものとされる(「」は筆者が付す)。よって、大きさを「大」となる見出し6を HL とすれば、相対的に「小」となる見出し7の SHL が、意味的にはより拡充されていなければならない。しかし、見出し7がかえって省略され、拡充されているとはいえないのだ(下記、再掲)。

(見出し6・HL) 電気にたよらない生活を心がけてみる(第26088号2面)

(見出し7・SHL) 電気にたよらない生活を(第26088号2面)

では、ここまでの分析は、HL と PHL や SHL の区分を誤ったのだろうか。意味による見出しの上位・下位を見直すならば、文字の大小によって上位・下位を細分してみてもどうか。再度、見出しを細分し直して、節複合関係が認められるのか、確認したい。HL を最大の見出しで必須の要素とし、それより小さい文字で、同じサイズを全て、下位の見出し(SHL)として一括すれば次のようになる。

(見出し1・HL) 批判されても プロとしての力発揮を(第26088号1面)

(見出し2・PHL) 全国の読者からの反響(第26088号1面)

(見出し3・SHL) 大変なのは東電だけじゃない(第26088号1面)

(見出し4・SHL) 東電だけが悪いんじゃない(第26088号1面)

(見出し5・SHL) まずは、謝るべきだ(第26088号1面)

(見出し6・HL) 電気にたよらない生活を心がけてみる(第26088号2面)

(見出し7・SHL) 電気にたよらない生活を(第26088号2面)

これでは、見出し1が3本の投書(見出し3、4、5を冠した投書)を統合する内容でなければならない。しかし、意味的には1面に1本のみ、HL と SHL の見出しが付いていて、どちらの見出しも1本の投書にのみ、付いている。こうした違いは、投書の特集記事である本調査対象に特異な事情であろう。投書特集は、見出しの元に書かれる、とは考えにくい。投書がそのまま掲載されない(編集部による修正が施される)とはいえ、最初に投書者による意見があり、その意見から見出しが生成されると考えられるからだ。よって、SHL と HL は節複合関係における拡充の概念を適応することができないし、White (1997)

の核(the Hedline / lead nucleus)や衛星(satellites)の考え方を当てはめることもできない。

表 1

テキスト	紙面構成	節複合関係
批判されても プロとしての力発揮を	HL	主題
大変なのは東電だけじゃない	SHL	理由
僕の父は国家公務員です。東電だけでなく、仙台空港、福島空港などの航空局、海上保安庁などで働く国家公務員も命がけて職務を全うしているのです。父は自分の仕事に誇りを持っています。	投書	※主題展開の事例
ゆうだい君のお父さんもそうでしょう。少くくらしマスコミや評論家に批判されても(その人たちの仕事はそういうものです)、自信をもって、持てる力を発揮してほしいです。	投書	※主題の展開
大変なのは東電の人ばかりではないのです。	投書	※理由の展開

表 1 に、見出し 1 と見出し 3 と投書 F の節複合関係を分析した(※印をつけたものは、節複合関係とは言えないが、見出しと投書の関係について、意味的に説明したもの)。表 1 より、HL は投書の一部から任意の要素を抜き出し、SHL も投書の一部から任意の要素を抜き出していることが分かる。投書を読むと、HL と SHL が、主張とその理由の関係にあることも見て取れる。

では、こういった主張と理由のような、HL と SHL の関係性は、常に生成されるのか。また、HL はどのように「必須の」要素として付されるのか。別日で HL と SHL の関係を確認してみる。1 本の投書に見出しが 2 つ付く、5 月 31 日(第 26089 号)を例示する。

表 2

テキスト	紙面構成	節複合関係
具体例をあげて反対・賛成を	HL	主題 1
日本人がまとまるチャンス	SHL	主題 2
個人的な意見を言うと、「原発はやめるべきだ」という意見は、原発をひていしているだけで、これからどうやって電気をつくるのかなど、もし原発をすべて止めたときの具体的な方法などありません。私は、それがなっとくいかないのです。	投書	※主題 1 展開の理由
政治でも(中略)「〇〇を中止にしたあとに、□□を代わりに使ったほうがよい」、こちらのほうが「うーん」となりませんか? 「なるほど!」と思いませんか? 私は具体的な例をあげたうえで反対・賛成をしてもらいたいです。	投書	※主題 1 の展開
今、日本は最大の危機におちいっています。私はプラスに考えました。今は、日本人同しが、世界がつながる、まとまるチャンスです!	投書	※主題 2 の展開

表 2 に示すとおり、HL と SHL は異なる主題であり、関係性を認めることは難しい。ただし、表 1 と表 2 の節複合関係に※を付して意味的に説明したとおり、HL のほうが事例(表 1)や理由(表 2)があって詳しいことは、SHL より重要であると考えて差し支えないだろう。加えて、本項(3)では最大の文字を HL と仮定したため、新聞一面で、読み手に訴求すると選別された投書の中でも、第一に重要な主題が「必須の」見出しに選定されるものと考えられる。

4. 考察

投書特集は、内容から見ると多人数の意見が集合し、互いの意見をぶつけ合っているかのように見える。しかし、結束性からみると架空のテキスト性と結束的要素、両面から分析しても、一本ずつが分断

されていて、首尾一貫性(coherence)があるとは言えない。ただし、一本ずつ、それぞれが「ゆうだい君の手紙」という、特集の起点となる意見文との結束性を持つ。

各投書には、編集部による見出しや、各日のリード文が付く。このうち、見出しの検討に際して、報道記事と比べて投書特集は、見出しと記事のどちらが先行するかによって、大きな違いがあった。報道記事は、見出しの元に記事があり、節複合関係における拡充の概念を適応できるが、投書特集では、SHL と HL がともに主題を有し、任意の意見を切り取っていることがある。よって、節複合関係における拡充の概念を適応させることができるとは限らない。

では、投書特集というテキストに首尾一貫性(coherence)がないにも関わらず、何をもって投書特集というまとまりを生成しているのか。一つは、架空のテキスト性を生成する見出しやリード文であった。新聞が有する構造的な特性が、それぞれ分断したテキストを一か所に集約することで、首尾一貫性らしきものを生成する。

構造的な特性としてもう一つ、パタン化したものが存在した。それは、1面においてリード文とPHL、2面では定型句「= 1面からつづく」であり、各日の投書特集において、定位置に定型のテキストを配置している。この定型にした文章構造により、投書特集という集合体を形成し、各々のテキストに意味的な結束性がなくとも、構造的な結束性を架空に見せかけることとなる。

5. 結束性が生み出す、談話としての意味

投書とは、書き手の意見を主張する文章である。それに付される見出し HL あるいは SHL は、投書の一部の語句であった。本論の投書は、特集として複数、存在した。それぞれの投書の書き手は別人であり、主張は異なる。その主張は、直前の投書を踏まえたものではないため、投書同士、互いに意味的な結束性は認められない。ただ、「何について話しているか」あるいは「現在伝えたいのはこれである」という要素が「ゆうだい君の手紙」に端を発している、つまり、全ての投書において意見の起点(SFL)の用語ではテキスト形成的主题が「ゆうだい君の手紙」である、という構造的な一貫性があった。また、定型化した新聞という文章構造において、『ゆうだい君の手紙』という投書特集を形成し、架空のテキスト性は度々繰り返されていた。

このように、同一のテキスト形成的主题の投書を、定型化した紙面によって他日に及んで反復して読むことは、テキスト形成的主题である「ゆうだい君の手紙」が、多くの小学生新聞読者に拡散した、ということであり、みんな「で」話し合うのではなく、みんな「が」話したに過ぎない。ところが、テキスト形成的主题の反復と構造の定型化は、本来、ひとまとまりの文章に備わるはずの意味的な結束性が欠落していても、構造的に収斂していくようなテキスト性を生み出し、読者に首尾一貫性を予見させる。あたかも、日を追うごとに意見が深まっているようだ。そして、編集部は紙面を通して読者同士、「みんなで話し合う」ことができた、と述べてオチをつける。各投書を束ねる編集部は、投書特集という構造的なパタンを生じさせることで、意味関係に基づかない文章構造から、談話としての新たな意味を具現させたのだ。

本稿は SFL を用いることで、談話のメタ機能として伝達様式の種類、新聞の特徴と、その構造的な結束性から生じる談話の意味を確かめた。小学生新聞では、刊行の方法やレイアウトなどにおいて、長く踏襲されたことによる定型の構造や定型の句が存在する。先行研究にある一般紙の時事報道と異なり、小学生新聞の投書特集を対象にした本研究においても、架空のテキスト性、加えて、パタン化した定型句の繰り返しがあり、この構造的な結束性から「みんなで話し合う」のように、個々の投書に存在しない、談話としての意味が具現するのだ。

資料

毎日小学生新聞 第 26076 号、第 26088 号、第 26089 号、第 26090 号、第 26108 号、第 26109 号、第

26144号(いずれも2011)より。引用では掲載時の振り仮名を省く。

引用文献

- 1) 森達也. 僕のお父さんは東電の社員です. 現代書館, 2011.
- 2) 設楽馨. 3.11 原発事故をめぐる小学生新聞の投書. 武庫川女子大学紀要. 2019, 第 67 巻, pp.11-20.
- 3) 龍城正明. ことばは生きている 選択体系機能言語学序説. くろしお出版, 2006, pp.14-15.
- 4) 龍城正明. ことばは生きている 選択体系機能言語学序説. くろしお出版, 2006, p.16.
- 5) M.A.K. ハリデイ・ルカイヤ ハサン, 安藤貞雄ほか訳. テクストはどのように構成されるか—言語の結束性—. ひつじ書房, 1997, p.5 および p.385.
- 6) M.A.K. ハリデー, 山口登・笈壽雄訳. 機能文法概説—ハリデー理論への誘い—. くろしお出版, 2001, p.532
- 7) White, P.R.P. “News as history: Your daily gossip”. In Martin, J. R. & Ruth Wodak (eds.), *Re/reading the past: Critical and functional perspectives on time and value*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 2003, pp.61-90.
- 8) 鷲嶽正道. 日本語の新聞報道記事のジャンル構造. 機能言語学研究. 2009, No.5, pp.33-45.
- 9) M.A.K. ハリデイ・ルカイヤ ハサン, 安藤貞雄ほか訳. テクストはどのように構成されるか—言語の結束性—. ひつじ書房, 1997, pp.390-391.
- 10) M.A.K. ハリデイ・ルカイヤ ハサン, 安藤貞雄ほか訳. テクストはどのように構成されるか—言語の結束性—. ひつじ書房, 1997, p.391.

受理日 2022年12月5日